

13 / ザメッティ

2007(平成19)年4月15日鑑賞(テアトル梅田)

★★★★



監督・脚本・製作＝ゲラ・バブルアニ／出演＝ギオルギ・バブルアニ／オーレリアン・ルコワン／パスカル・ボンガール／フィリップ・パッソン／オルガ・ルグラン／オーギュスタン・ルグラン／ジョー・プレスティア／フレッド・ユリス／ヴァニア・ヴィレール／ディディエ・フェラーリ（エイベックス・エンタテインメント、ロングライド配給／2005年フランス映画／93分）

……この映画の主人公は、ひょんなきっかけで「ロシアン・ルーレット」による命をかけたゲームに巻き込まれた若い男。リボルバー式拳銃の中には1発の弾丸が。その弾倉を回転させ脳天に向けて引き金を引けば、生か死か2つに1つ……。そんな危険で邪悪なフィルム・ノワールには、白と黒のコントラストがよくお似合い……。緊張感あふれるシーンの連続に圧倒されるものの、へそ曲がりの私には、ルールについて納得できない点が数点あり。さてそれは……？

ザメッティとは……？

この映画は2005年のフランス映画で、2005年のベネチア国際映画祭での最優秀新人監督賞をはじめ、さまざまな賞を受賞している作品。しかし日本では、全然評判になっておらず、大阪ではテアトル梅田1館のみでの上映だから、そもそも『13/ザメッティ』というタイトル自体何のことかサッパリわからないはず……。もっとも、2、3回観た予告編の印象は強烈で、私があらかじめ調べておいたこの映画評論の「頭」には、鉛筆書きで大きく「ロシアン・ルーレット」とメモしていたもの。つまりこの映画は、ロシアン・ルーレットによる殺し合いゲームの映画という強烈なイメージが先に植えつけられていたことによって、「これは観なければ……」という動機付けになったもの。しかし、「ザメッティ」とは「TZAMETI」というグルジア語で、数字の13を意味するもの。なぜグ

ルジア語なのかということ、それはゲラ・バブルアニ監督がグルジア出身だから。13という数字は不吉なものというのがキリスト教徒の常識だが、それはグルジア出身ながら17歳からパリで教育を受けたゲラ・バブルアニ監督も同じ……？

ギオルギ・バブルアニは『太陽の季節』における石原裕次郎……？

この映画の主人公セバスチャン役を演じて、鮮烈な印象を残したギオルギ・バブルアニは、これが映画初出演とのこと。また、1984年生まれの彼は何と1975年生まれのゲラ・バブルアニ監督の実の弟とのこと。

映画『太陽の季節』(56年)は、去る4月8日の東京都知事選挙で圧勝し、3度目の当選を果たした石原慎太郎のデビュー小説を映画化したものだが、これにズブの素人石原裕次郎が主演として起用されて大ヒットしたことは有名な話。石原慎太郎の小説が生み出した「太陽族」なる言葉を、素の演技で見事にスクリーン上に炸裂させたのが石原裕次郎だったから、この『13/ザメッティ』で長編映画初監督作品となった兄ゲラ・バブルアニの映画に初出演し、邪悪な「ロシアン・ルーレット」ゲームに生死を賭ける役で登場したギオルギ・バブルアニは、まさに『太陽の季節』における石原裕次郎に酷似……？

フィルム・ノワールには白黒映画が……？

今ドキは映像技術の進歩もあり、色彩の美しさを競う映画が多い。3月29日に観た馮小剛監督の中国映画『女帝 エンペラー』(06年)もその1つで、赤を基調とした色彩美はホレボレするものだった。しかし、この『13/ザメッティ』はそんな時代の中、あえて白黒映画に……。 「ロシアン・ルーレット」をテーマにしたこの映画最大の特徴は緊張感。そりゃそうだろう。13人の男たちがリボルバー式拳銃に弾丸を1発だけ装填し、適当に弾倉を回転させたうえ、前の男の脳天に拳銃を突きつけ、そして自分の頭にも後ろの男から銃口が突きつけられる、そんな人間の命をターゲットにしたロシアン・ルーレット博打のプレイヤーとしてゲームに参加している男たちの姿を観れば、観客だって極度の緊張感に襲われるのは当然。そんな緊張感を引き立たせ、観客に思わず生つばを飲み込ませるためには、チャラチャラしたカラー映像よりも白黒の方がベター。ゲラ・バブルア

ニ監督がそう考えたのは当然。しかして、その効果は……？

事前情報のない方がベター……？

外国映画は登場人物の顔と名前が一致しないことが多いため、予備知識ゼロで観た場合ストーリーがよくわからないケースがある。その意味では、あらかじめその映画のテーマやストーリーの大枠を知っておくことは悪くはないのだが、ストーリーの筋を読めないことを「売り」にしている映画では、それを事前を知ることはナンセンス……？ しかしてこの映画では、冒頭に紹介される物語だけでは一体それがどんな展開になるのかさっぱりわからないところが売り……？

この映画の主人公セバスチャンは屋根の修理屋で、両親と兄（ゲラ・バブルアニ監督自身）と共に生活している。そんなセバスチャンが今修理しているのは、ジャン＝フランソワ・ゴドン（フィリップ・パッソン）の家の屋根。屋根を修理している最中、下の部屋から聞こえてきた話によれば、ジャンは借金を申し込んでいる友人に対して「今は金はないが、近々大金を手にする方法がある」と説明していた。そして、それを友人と共に聞いていたのがジャンの妻のクリスティーヌ（オルガ・ルグラン）。ところがどうもジャンは薬物中毒らしく、その行動はヘン。そのため、セバスチャンはクリスティーヌから2度も応援を頼まれたが、3度目には遂にジャンはお陀仏に……。そんなジャンの家の郵便箱に配達された1通の封筒をジャンは大切に保管していたうえ、それを外の車の中から見張る男までいたのだが、ジャンの死亡によってその封筒は誰の手に……？ そして、その封筒には一体何が書かれていたの……？

度胸試しのゲームは他にもいろいろ……？

ロシアン・ルーレットとは、本来「死の恐怖」と戦う人間の弱さの限界を競うもので、自分の頭に向けて自分で引き金を引くゲーム。恐くなって天井に向けて引き金を引けば、もちろんそれで負け……。このような度胸試しゲームは、ロシアン・ルーレットに限らずいろいろある。ちなみに車を競争させ、断崖絶壁の限界ギリギリで車を停めるゲームもその1つ。すなわちこれは、そのまま谷に突っ込んで死亡してしまうかもしれないという恐怖心と戦いながら、ギリギリまでス

ピードをゆるめないという度胸を試すもの……。そんな度胸試しゲームをやれば、口先だけの強さかそれともホンモノの強さがわかるというのだが……？

ルールについての疑問 その1

それはともかく、この映画では円状に配置された13人のプレイヤーたちが、自分の頭ではなく、自分の目の前に立つ男の脳天に向けて銃口を向け、中央につるされた裸電球が点灯すると同時に引き金を引くというルール。しかも1回戦は弾丸1発だが、2回戦は2発、3回戦は3発というルールのようなことから、死ぬ確率がどんどん上がってくるのは当然。そこで、このルールに対する私の疑問の第1は、これは人間の命をターゲットにした確率のゲームだから、1回戦で13人全員が死亡したらどうなるの、ということ。そうなれば賭けは成立せずドローになってしまうはずだから、13人は犬死に……。この理屈は参加者が徐々に減る可能性が高い2回戦、3回戦にもあてはまるはず……。

この映画が鋭く描くのは、その緊張感とプレイヤーたちの恐怖心だが、それは、この映画のような理想的な展開(?)になった場合にのみ成り立つのでは……？

ルールについての疑問 その2

もう1つ面白いルールは、最後に4人残った本件においては、黒ボール2個、白ボール2個を誰が引くかというくじ引きをやり、黒ボールを引いた2人のサシの勝負とし、それで勝った者を優勝者としていること。しかしそれでは、そんなどこにでもあるようなくじ引きで負けた2人は、それまでの命懸けのルールと異なり、あまりにも安易なのでは……？

さらにくじ引き勝者2人によるサシの勝負は、2人が向き合い裸電球の点灯と同時に打ち合うもの。しかも弾丸は3発だ。するとここでも、2人が共に死んでしまったらどうなるの……。その場合は、ひょっとしてくじ引きで負けた2人の敗者が復活するの……。しかし、その2人ともまた死んでしまったら……？

ルールについての疑問 その3

第3の疑問は、自分の脳天に向けて自分で引き金を引くのは問題ないが、他人

の脳天に向けて引き金を引くタイミングが、コンマ0.00何秒も狂わずに13人のプレイヤーが一斉にできるのかどうかということ。競泳でも100メートル走でも、一瞬のスタートの差が明暗を分けるのは当然。たとえば、私の後方のプレイヤーの引き金を引くタイミングが少し私よりも早く、かつその拳銃に実弾が入っていたとすれば、私は即死となるため、そもそも私は前方の男に向けて引き金を引けないのでは……？ そうなると、誰だって人よりも早く引き金を引きたくなるのが人情だから、このコンマ0.00何秒を争う引き金引きについて、裸電球の点灯と同時に、などというあいまいなルールは問題が多いはず……。競泳や100メートル走なら、1回目のフライングはやり直し、2回目のフライングは失格というルールでオーケーだが、人間の命をターゲットとしたこんな賭けでは、そんなやり直しは効かないはず……。

1ドル=約120円、1元=約15円、すると1ユーロは……？

1957年にヨーロッパ経済共同体（EEC）が発足し、1965年にヨーロッパ共同体（EC）となった後、2002年には遂に通貨の統合が実現し、今やヨーロッパでは、ユーロが共通の貨幣になっている。島国ニッポンでは、戦後最大の同盟国となった米ドルについては、現在1ドル=約120円とよく知られており、ついで中国の1元=約15円も最近よく知られている……。しかし1ユーロが何円かについては、実は私も知らなかったもの。そこで調べてみると、1ユーロ=約162円。するとこの映画で13人のロシアン・ルーレットの優勝者セバスチャンが最終的に獲得した85万ユーロとは、何と約1億3700万円。もちろんこれはプレイヤーだけの取り分だから、出資者は一体いくらのもうけ……。逆に、勝負に負けた人間たちの損金は……？

そんな巨大な金が動く危険で邪悪なバクチだから、過去3度このゲームで勝ち残りながら、今回は最後のセバスチャンとの勝負に敗れた6番のプレイヤーであるジャッキー（オーレリアン・ルコワン）や出資者となっているその兄たちがこの勝負に賭けていた必死さも当然……。したがって勝負が決した後、生き残った兄がセバスチャンに対して取った行動とは……？

2007(平成19)年4月16日記